

(広島大) 絹谷一雄, 中川 繁, 平田政司

先天異常の発生を実験的に検討しようと思い, この実験を試みた。

中性子線照射には東芝製T (d.n) 反応中性子発生装置を用い, X線照射は東芝 KXC-18—2 型X線発生装置を用い, 妊娠マウス (ddN 系) に交尾後4日目, 8日目, 12日目に中性子線は40rad, X線は120rad を照射した。

異常胚を宿した母マウスの頻度は中性子線照射では12日日照射群に最も頻度高く, X線照射では4日日照射群に多くみられた。

1腹の平均胚数は中性子照射群で妊娠4, 8, 12日日照射でそれぞれ9.0, 8.0, 8.9, X線照射群では6.0, 8.0, 9.5で非照射群の9.5より少なかった。

発育胚のBody Build IndexはRusselのIndexでは非照射群と大差は認められなかったがWilsonのIndexではX線12日日照射群で発育がもつとも悪かった。

胎内死亡胚は妊娠4, 8, 12日日照射で総胚数に対し, 中性子線照射群では8%, 12%, 27%, X線照射群では33.3%, 9.0%, 15.0%で, 肉眼的に観察した形成異常は中性子線8日日照射群に脳ヘルニア1例, 中性子線12日日照射群, X線8日日照射群に頭血腫1例を認めた。

尚中性子線照射, X線照射は以上の他妊娠9, 10, 11, 15日日照射を行い, 更に線量をX線200rad, 中性子線120radで行っており。又¹³⁷Csの妊娠マウス尾静脈より注入を行っており学会ではその成績も追加発表する予定である。

142. (演) 被爆婦人の産婦人科的後障害について

(広島大) 石橋亨規, 太田 暁, 村上英子

我々は広島大学医学部附属病院産婦人科の外来並びに入院にて加療せる被爆婦人につき, 2, 3の産婦人科的臨床観察を行つたので報告する。

1) 外来患者での調査

最近3年間に当科外来を訪れた被爆婦人は827例で外来患者の14.9%にあたり。

a) 外来診断は陰部ビラン, 子宮後屈, 附属器腫瘍, 機能性出血, 膣炎の順に多く(腫瘍と不妊症を除けば),

非被爆婦人との間に差をみなかった。

b) 不妊を主訴として来院せる患者117例中被爆婦人は22例18.8%で, 連続3回以上流産を反復せる患者52例中, 被爆婦人は5例9.62%であったが, いずれも被爆障害に帰因すると考えられる症例をみなかった。

2) 入院患者の性器腫瘍

入院せる被爆婦人57例の内性器腫瘍と診断されたものは31例54.3%(子宮癌15例, 子宮筋腫10例, 卵巣腫瘍6例, 良性2例, 悪性4例)で, 非被爆婦人の入院患者での頻度(31.9%)よりもやや高率であった。

3) 被爆婦人よりの出産児

被爆後に妊娠し分娩した474名の婦人よりの出産児は832例で,

a) 性比は832例中男性429例, 51.6%で非被爆婦人よりの出産児のそれは53.6%で共に男性高位であり。

b) 死産及び新生児死亡は832例中55例6.6%で, 非被爆婦人の5.2%よりもやや高率であった。

c) 体重2500g以下の未熟児出産は832例中72例8.7%であり。

d) 出産児での奇形は832例中兔唇1例, 多指症1例であった。

143. (示) コバルトプロトポルフィリンに関する基礎的, 臨床的研究

(大阪市大) 藤森速水, 山田文夫
菅本一三, 野田 定, 土屋英和
豊田長久, 北島栄彦

日本ブラッドバンクよりコバルトポルフィリン(COPP)の提供を受け, 主として子宮頸癌患者に使用し, 若干の知見を得た。即ち臨床的には一般状態, 肝機能, 腎機能, 血液所見, 副作用を検討する外, 殊に局所所見についても組織学的, 腔鏡的並びに腔頭微鏡的検索を行つた。又手術剔出標本, 血液等に於けるCOPPの分布状態を生化学的に検討した。又動物実験的に担癌動物の延命効果, 腫瘍の³²P摂取などを検討した。制癌剤の効果については速断出来ないが, 本剤は比較的副作用も少く, かつ若干の制癌効果がみとめられ, 今後制癌剤として使用するに足るものではないかとも考えられ, 目下研究継続中である。